

RAILWAY & CINEMA

今回は、サイレントコメディの傑作、「キートンの大列車追跡」を紹介する。チャップリンやロイドと並ぶサイレント時代の喜劇俳優にして監督、バスター・キートンが一九二七年に撮った代表作であり、邦題では「キートン将軍」と題されることもある。バスター・キートンは、映画の中で表情を変えないので有名であり、グレイト・ストーン・フェイスと呼ばれる。よく並び称されるチャップリンが、ボケ役的な演技で笑いをとり、ヒューマニズムとペーソスにあふれる作品を作るのに対し、キートンは、考え抜いたギャグで笑いをとり、その作品は、スリルとアクションが中心である。チャップリンがトーカー全盛になつても、高い人気を誇つたのに対し、キートンは、サイレントが下火になると彼の人気も下火となり、晩年は不遇であつたようである。あらゆる意味でチャップリンと対照的な人であるが、チャップリンの晩年の名作「ライムライト」で競演していたところからすると彼もキートンには一目置いていたことがうかがわれる。

鉄道と映画 — 31

機関車を恋人同様に愛する機関士の冒険活劇。
サイレントコメディの代表作。

THE GENERAL

「キートンの大列車追跡」



文・羽生次郎
text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション（FC）への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

物語は、複雑なものではない。南北戦争の時代、南軍の支配する地域で、キートン扮する蒸気機関車機関士ジョニー・グレイは、北軍のスパイに機関車ジェネラル号を恋人と一緒に奪われてしまう。これを果敢に追跡、ついに敵地に入り、機密情報を聞き出した末、恋人と共にジェネラル号を奪還、南軍の危機を救うというものである。なお、南軍の勝利で映画が終わるといふのも珍しいと思う。

現在のコメディに慣れた眼からするとこの映画に鋭い風刺やボケのシーンがあるでもないし、また抱腹絶倒するようなギャグがあるのでもない。しかし、何が起きても顔色一つ変えず、生じた事態へ立ち向かっていく姿には悲壮感はなく、にもかかわらずアクションは、大真面目で激しいところに可笑しさがあるのではないかと筆者は考える。今回見て、ニヤリとしたシーンは、主人公が恋人と一緒に機関車で逃げる途中に火をつけてもらおうとタバコを差し出すのであるが、燃料にすべきと誤解した恋人が機関車の釜にくべてしまい、頭にきたキートンが思わず恋人を締め上げそうなる。しかし、途中で気づき、キスをするための動作のように誤魔化すのである。この間キートンが表情を変えないで演じるから思わずニヤリとしてしまったのである。

冒頭のシーンから登場する蒸気機関車は見応えがある。前面に線路上の障害物を除去するための巨大なバンパーを備えた機関車が実に堂々と登場し、主人公の機関士ならずとも惚れ込んでしまう。さらに、カーチェイスというのは、アクション映画の定番であり、通常自動車同士のものが多いが、この映画では、機関車同士が同じ線路の上で追跡する。前半はキートンが追う側、後半は追われる側となり、障害物を設けたり、待避線やポイントを使ってチェイスを繰り広げたりした末、最後の南北両軍の戦闘シーンでは、機関車が炎上する橋の上から落下するなどサービス満点であり、機関車の走行場面が多彩なことがこのカーチェイスの大きな魅力になっている。

最近のボケと突っ込みの競い合いや品の悪さを売り物にするコメディには辟易とされている方も多いと思うが、この映画は、そのような品の悪さが全く無いだけでなく、映像のみにより笑いを引き出している。古典的なコメディ映画の代表作であるので、一見される価値があると思う。